

参考資料

地域日本語教室の5つの機能にかかわる先行研究

地域日本語教室の機能や役割の観点から、野山班における「5つの機能」(p.74 1. 地域日本語教室の場の機能) の考察に少なからぬ影響を与えた先行研究について、以下にまとめておく。

第1に、「居場所」としての日本語教室に着目した先行研究については、二通・大井・喜多村(1999)が、札幌市の日本語ボランティアグループへの面接調査の結果に基づき、地域日本語教室の役割と課題について論じている。札幌圏の学習者にとっては、ボランティア教室が「心のよりどころ」や「地域社会への窓口」と認識されており、また、日本人市民にとっても生涯教育の場として機能しているという。

仲川(2007)は、奈良県において1990年代から、「友好・親善・交流」から「理解・協力・共生」への意識改革の中で、公的なサービスとしてではなく民間レベルで外国人のための日本語教室を開講した経緯を紹介している。この研究において紹介されている学習者の談話が興味深い。外国人住民による、「テーブルコーダーのように辛抱強く聞いてくれた」、「教室の中に世界がある」、「ここだけが奈良のオアシスだった」といった談話を紹介しており、日本語教室を、自分のありのままを受け入れてもらえる空間として位置づけていることがうかがえる。

文化庁(2004)は、まさに「居場所」としての日本語学習の現場を提唱している。たとえ日本語が上達しなくても来ていい場所、地域の人たちに受け入れてもらえる場所として、「地域の共通語としての日本語」の学習支援や、その学習を通じた生活支援の具体例を紹介している。教室が「居場所」として機能するためには、日本人住民同士がその理念を理解し、それを地域に広げていくことが必要であるということが、示唆されている。

第2に、「交流」としての日本語教室についてである。森本・服部(2006)では、地域の日本語教室では、ボランティアと学習者との間の「教える—教えられる」の関係が、「日本語母語話者—非母語話者」の関係を背景に成立しており、容易に覆しがたいとしている。結論として、より日本語を中心とした活動から日本語にとらわれない活動へと軸足を移すことが、今後真剣に検討すべき事項としている。「交流」というキーワードは日本語学習の関係性の捉えなおしから始まる、

ということを読み取ることができる。

田中（1996）は、より個別事例的に、地域社会に定住するアジアからの女性たちに着目し、その日本語に対する気持ちの談話を観察している。外国人が「自分の声」でコミュニケーションを行う機会を保障することが、社会の民主化の突破口になるという。日本人住民が気づくことの難しい当事者が持っている課題を、外国人住民自身に語ってもらえるような場が「交流」の一形態である、ということが示唆されている。

また、西口・新庄・服部（2007）は、既存の地域日本語教育の発想では、「ケアする側」「ケアされる側」という非対称な関係があり、同化要請の活動となりうると危惧している。ここでいう「交流」は、コミュニケーションスペースとして教室を捉え、外国人と日本人が集う教室こそが、多様性を内包した貴重な対話の場であり、交わって日本語で話すまたとない機会であるという考えであるという。非対称な人間関係に警鐘を鳴らし、交流の場としての教室で起こるコミュニケーションを肯定的に捉えるということは、各先行研究に広く述べられている視点である。

第3に、「地域参加」を日本語教室の役割として挙げている先行研究については、内海（2000）が、日本語教室は学習リソースの1つに過ぎず、そこに関わるのは学習者と教授者だけではないとした上で、地域社会に対して広がりをもった日本語学習を目指すことが望ましいとしている。そのうえで、教室以外にも積極的にネットワーキングを行う教授者を「地域日本語教育の担い手」と捉え、研修などのイベントを通じたその支援を提唱している。地域内の様々な主体が地域リソースや情報を共有することで、住民の地域参加のきっかけがつけられるということが示唆されている。

また、山田（2000）は、地域日本語教育の取組みの起源から、「地域参加」と地域日本語教育の関係を見つめている。山田によれば、行政等の公による対応の不備から、社会教育に参加したいと思っていた日本人住民が、外国人の「社会への参加を目指した言語習得」のために行う補償教育を受け持ったところに始まったとしている。日本人と外国人によって構成される地域社会の中で、両者の対等・平等な社会参加をどう実現していくかの議論を通じて、住民の意識改革を目指す必要があるとしている。

一方、藤田（2004）は、東北地方の農村地域に暮らす住民の1人である外国人配偶者を例に、その地域社会への参加のプロセスを追うことで、外国人配偶者の視点からの日本語学習の意味を考察している。日本語学習を通じて地域参加が可

能となることがそのゴールなのではなく、日本語教室以外の場へと人間関係や社会関係を広げていくことこそが、地域での一生活者としての外国人配偶者の地域参加なのではないかとしている。「地域参加」の観点から地域日本語教育を見つめた数少ない研究の1つである。

第4に、「国際理解」の場として日本語教室を捉えた先行研究を紹介する。岡崎（2007）は、増加する定住外国人とともに築く社会を構築するためには、日本語母語話者も学習者であると捉えることが求められるとしている。人々の対話の中で、その中の個人が抱えている問題が実は社会的な問題だと気づくことで、その対策を立てることが共生日本語教育の実践上の課題の1つであるという。日本語教室の場を、異文化接触から起こる諸問題を解決する場として考えているといえる。

また、助川（2005）では、具体的な事例として宮城県を挙げ、国際結婚や技術研修生の多い地域特性を踏まえた、多様な学びの事情について記述している。さらには、文化理解を実践しながら日本語学習の項目を結びつけて学習する大切さにおいて、示唆的な考察をしている。多文化化する地域をリソースとしてうまく用いながら、日々の日本語学習と関連付けていく試みには、学ぶべきところが多いといえる。

国際理解をうまく学び合いのきっかけとして捉えた研究として、尾崎（2004）のものがある。尾崎は、日本語教育を「学校型」と「地域型」とに分類し両者の比較をする中で、「地域型」日本語教育の原則として、日本語習得の原則と無条件参加の原則に加え、学習者とボランティア教授者の相互学習の原則を挙げている。それは、学習者を「日本語の不十分な弱者」と見るのではなく、豊かな異文化体験を持つ仲間と考え、学習者について知ろうとする姿勢を持たなければならないということだという。互いに自己開示をしながら、相手の持つ文化を知りたいと感じていく活動のプロセスをつくり出すことが、地域日本語教育の1つの焦点である。

最後に、「日本語学習」の場として地域の日本語教室を捉える際の留意点を考察し、教室の機能を包括的に述べている先行研究を挙げる。富谷（1999）は、各地の日本語教室を概観し、日本語教室の3つの柱として、学習したい外国人、学習に付き合おうという教える人、そしてそれを支える行政や地域の他のネットワークがあるとした。また、様々なニーズの中でできることとして、学習支援、交流、生活支援の3つを挙げ、教えたり学習したりするということは半分くらいのウェイトで、学習者の生活を実質的に支援する場であることが大切だとしてい

る。地域日本語教育の場が持つ役割の大きさを感じることができる。

一方、二通（2006）は、日本語教室の機能が多様化する中で、従来型の地域の教室とは異なる内容や形態の日本語学習の必要性について論じている。学習の場の拡大の中で、教室での日本語教師の役割は、どのように学習設計を行うかを問うことであるという。地域日本語教育の場の多様な在り方が認められ、関係者の理念もそれぞれ異なっていく中で、それらに共通する機能や役割を考察することの必要性が示唆される。

その中で、足立（2006）は、具体的な地域日本語教育の活動のヒントを、実際の教材とともに示している。参加者自身が教室の役割について考えながら、地域と活動を結び付け、日本語に不慣れな人に寄り添う姿勢を紹介している。「言葉」について活動を通して時間をかけて考えることで、豊かな関係をつくり上げていくことができるとしている。コミュニケーションは情報のみならず気持ちを伝え合う機能も持っているとし、日本人もそれを磨いていく場として、地域の日本語教室の持つ役割を捉えているのである。

[参考文献]

- 足立祐子, 2006, 「地域の日本語教室とその役割—多文化共生社会づくりの担い手として」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性』アルク, pp.103-118.
- 岩見宮子, 2002, 「地域日本語支援コーディネータ研修事業について」『日本語学 21』, pp.68-76.
- 内海由美子, 2000, 「地域日本語教育の「担い手」教授者のグループネットワークについて」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究—最終報告』日本語教育学会, pp.113-123.
- 岡崎眸, 2007, 「共生日本語教育とはどんな日本語教育か」野々口ちとせ・岩田夏穂・張瑜珊・半原芳子編『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために』雄松堂出版, pp.273-308.
- 尾崎明人, 2004, 「地域型日本語教育の方法論試案」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育—日本語を対象として』くろしお出版, pp.295-310.
- 齋藤ひろみ, 2002, 「学校教育における日本語学習支援」『日本語学 21』, pp.23-35.
- 杉澤経子, 2002, 「市民活動としての日本語学習支援—共に育む場をめざして」『日本語学 21』, pp.59-67.
- 助川泰彦, 2005, 「宮城県におけるボランティア日本語教室」日比谷潤子・平高史也編『多言語社会と外国人の学習支援』慶応義塾大学出版会, pp.85-123.
- 仙田武司, 2002, 「島根県における日本語学習支援の取り組みについて」『日本語学 21』, pp.50-58.
- 田中望, 1996, 「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之『日本語教育・異文化間コミュニケーション—教室・ホームステイ・地域を結ぶもの』北海道国際交流センター・凡人社, pp.23-37.
- 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター, 2008, 『シリーズ多言語・多文化協働実践研究 5【野

山班】07年度活動—地域日本語教育から考える共生のまちづくり—言語を媒介にともに学ぶプログラムとは』

- 富谷玲子, 1999, 「地域に暮らす外国人のための日本語学習支援—日本語教室・日本語ボランティアにできること」 国立国語研究所日本語教育センター 『「こんにちは」から始めよう—日本語ボランティアができること—日本語教育相互研修ネットワーク研修会旭川会場報告書』, pp.4-25.
- 仲川順子, 2007, 「人と文化と自然が共生できるまちづくり—国際理解教育の実践を通して」 毛受敏浩・鈴木江理子編 『「多文化パワー」社会—多文化共生を超えて』 明石書店, pp.135-158.
- 西口光一・新庄あいみ・服部圭子, 2007, 「共生を育む地域日本語活動に向けて」 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」編 『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書 2004-2006』, pp.59-97.
- 二通信子, 2006, 「国内の日本語学習の場の広がり」 国立国語研究所編 『日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性』 アルク, pp.10-32.
- 二通信子・大井裕子・喜多村喜美江, 1999, 「地域におけるボランティア日本語教室の現状と課題—インタビュー調査および二つのグループの事例を通して」 国立国語研究所日本語教育センター 『日本語教育論集 14』, pp.58-78.
- 野山広, 2002, 「地域社会におけるさまざまな日本語支援活動の展開—日本語習得支援だけでなく共に育む場の創造を目指して」 『日本語学 21』, pp.6-22.
- 藤田美佳, 2004, 「日本語学習の場を足がかりとした外国人配偶者の地域参加—農村に嫁いだ韓国人高齢女性の生活を通して」 『日本の社会教育（日本社会教育学会）48』, pp.129-144.
- 文化庁, 2004, 『地域日本語学習支援の充実—共に育む地域社会の構築へ向け』 国立印刷局.
- むさしの参加型学習実践研究会, 2005, 『やってみよう「参加型学習」!—日本語教室のための4つの手法—理念と実践—』 スリーエーネットワーク.
- 森本郁代・服部圭子, 2006, 「地域日本語支援活動の現場と社会をつなぐもの—日本語ボランティアの声から」 植田晃次・山下仁編 『「共生」の内実—批判的社会言語学からの問いかけ』 三元社, pp.127-155.
- 柳澤好昭, 2002, 「数字で見る日本の外国人」 『日本語学 21』, pp.78-90.
- 山田泉, 2000, 「「地域日本語教育」の二つの在り方とその教授者のネットワーク」 『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究—最終報告』 日本語教育学会, pp.176-189.
- 山西優二, 2004, 「多文化共生に向けての教育を考える」 田尻英三・田中宏・吉野正・山西優二・山田泉著 『外国人の定住と日本語教育』 ひつじ書房, pp.103-127.
- 米勢治子, 2002, 「地域社会における日本語学習支援—愛知県における活動」 『日本語学 21』, pp.36-48.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S., 2001, *Approaches and methods in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press. アナハイム大学出版局協力翻訳チーム訳, 2007, 『アプローチ & メソッド世界の言語教授・指導法』 東京書籍.
- Lave, J., & Wenger, E., 1991, *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. 佐伯胖訳, 1993, 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』 産業図書.